

四国地方における維新後の衣生活  
 和洋女大 文家政 鷹司 繪子

目的 南港以後の他国の文化の流入が、明治維新といふ国家体制の全変革によって、人ひとの生活にどのような変化を起したかについて、日本列島の北から検討してきた。本身は四国地方諸県における変化について考察する。

資料 本学施行の『明治生活調査』、県・市町村史・民俗史誌等を主に用いた。

結果 四国は独立した島嶼であるが、ふるくから、主要港のある九州と本州を結ぶ交通路の一つとしていられた地域と、反面、深い山岳地帯、そして太平洋に面した地域、と様々な部分をむつとこころである。幕末には黒船の接触もあり、明治2年には早くも英国人技師が測量と“獅子狩”をしたところさえあった。そうした他との交流の身、例えは序和島藩のように、“朝廷の御沙汰”で許可された衣服が、町で農民の常着或は本家持町人にも町で許してあり、あわてて銅いを出したり、明治2年には舶来品を木綿に洋じて許可する(吉田藩)といったように変化の早いところもあり、交通路の蒼蓮等がこのような変化を他へすすめていくが、通りに草履などの品と金入をいれてなく“人住し高い”が大正末までなつたところもある。変化のゆるいところもあった。更に織物では絹や木綿が改良機で良質化する反面、太布がいつまでむつくられたことのある地域が併存するといふ、各地の多面性を持つ変化を明らかにした。